

第20回学会発表のまとめ

アダム・スミス『道徳感情論』における自然概念

太田 浩之（社会学研究科博士課程）

本報告では、アダム・スミスの『道徳感情論』における自然神学的記述が、そこでの彼の理論とどのように関係しているのか、という点を主に考察した。以下では、まず、最初に報告内容に関して、次に質疑応答で行われたやり取りに関して簡潔に述べていく。

本報告が目的としたのは、スミスの道徳哲学理論と自然神学的記述の関係である。こうした問題設定が行われたのは、スミスの個人的信仰の立場に関する憶測などの曖昧な要素を可能な限り排除し、より厳密な議論を展開するためである。しかし、こうした議論の仕方はそこまで特徴的なわけではなく、先行研究においても同様な試みは見られる。だが、そうした研究において主に着目されてきたのは、「見えざる手」に関する議論であり、神学的枠組みと調和的世界観の関連であった。本報告では、そうした議論に比べ十分に注目されていないと思われたスミスの議論、すなわち、彼の人間の能力の行使を限界付ける議論と、自然神学的記述との密接な関連を示すことによって、彼の神学的枠組みが道徳哲学理論における否定的側面と関係していることを示すことが目指された。

こうした目的のもとで取り上げられたのは、スミスの二つの議論である。まず、第一

に、正義論における効用論である。そこでの議論を検討することによって、スミスが、全体の効用を図るという意味での理性ではなく、感情に道徳的判断の本源的基礎を見ていることを明らかにした。そして、ここでの議論が、不完全な存在としての人間によって行使される理性と、完全な存在としての神が人間に与えた感情という対比を表明する神学的記述によって、強調されていることが述べられた。こうして理解された、全体の効用を計画する理性に対するスミスの否定的見解は、本報告で扱われた二つ目の議論である、体系の精神に関する議論を考察することによってさらに傍証された。しかし、体系の精神に関する議論は、もう一つ別の重要な論点を含んでいると考えられたのであり、それは、普遍的仁愛という、我々の道徳的能力の行使に基づいて行われる行為についてさえもスミスが否定的見解を持っていたということである。ここでも、このスミスの否定的見解は、彼の神学的記述、特に人間の不完全性を表現する記述によって強調されていることが述べられた。以上、二つの議論の検討を通して、スミスの自然神学的記述が、効用を計画する理性と普遍的仁愛に対するスミスの批判的見解に密接に関係付けられていることが示された。

以上の報告に対して、多くの貴重なご指摘、ご意見をいただいた。まずは、本報告の問題設定に関わるものであり、それは啓示宗教、自然宗教、理神論の関係である。さらに、他にも正義論の感情論的基礎付けや、ハイエクの議論を念頭に置いた質問などをいただいた。加えて、報告者自身も不十分さを自覚しているところではあったが、そうした神学的記述が受け入れられることによって、例えばヒュームなどの議論との相違がどのように生み出されているのか、という点に関するご指摘もいただいた。これは、本報告が、スミスの議論の否定的側面のみに着目をしたために生じた疑問だと思われるが、同時に、それが「見えざる手」に代表されるスミスの構想した世界観と十分に接続されていないことを指摘するものだとして理解した。以上のご質問には十分にお答えすることが出来なかったが、今後の研究を進める上で有益なご指摘をいただいたと思うので、それらに十分に応答が出来るように研究を進めていきたいと思う。